

馬琴『椿説弓張月』の長編化構想

——話型の反復と連鎖——

金 学 淳

はじめに

江戸後期は専門作家の出現、貸本屋の興隆、読者層の増加などにより、執筆は文人が教養のために書く行為ではなく、売文商売に繋がるものになった。馬琴（一七六七—一八四八）は本格的な商業作家としてそのような時流の中に登場する。長編読本と長編合巻の作家として著名になるのだが、商業的な作家がもっとも意識するのは、自分の作品に対する読者の興味であり、人気であるう。そして人気が出たとすると、いかにその作品を長期に渡って創作し続けるかが求められた。その理由の一端には版元・貸本屋の利益、あるいは作家の原稿料を確保することであつたにちがいない。

馬琴が読本のなかで、力点をおいたのが後期の史伝物で、その嚆矢となった作品が『椿説弓張月』である。山東京伝の代作期を経て読本作家として一人立ちするきっかけとなった作品でもある。この長編小説の成功によって馬琴は江戸後期を代表する作家になり、その後、作品のおおむねが長編物として書かれた。ここに本稿の問題関心がある。すなわち馬琴は作品を長編化して書くためにどのような技法と構造を利用したのかということである。この課題を扱ううえでも馬琴の最初の史伝長編小説である『椿説弓張月』を対象にするのは適当だろう。

一 『椿説弓張月』とブレ・テキスト（話型）の析出をめざして―

『椿説弓張月』はその内容からも、『保元物語』を下敷きにして書かれたといわれているが、さらにその上に麻生磯次は『江戸文学と中国文学』のなかで中国の小説『水滸後伝』の影響を指摘した。だが、大高洋司は「後藤丹治が力を尽された古典大系版の注釈に、『水滸後伝』からの直接の投影がひとつも指摘されてないという結果は、やはり重んずべきではなかるうか。（中略）筆者は、『弓張月』執筆時、馬琴の手許に『水滸後伝』は置かれていなかったと想像する。琉球での物語は『水滸後伝』がなくても、十分にこのようなものとして執筆することが可能である」と指摘している。本稿にとってブレ・テキストの問題はひとまず置くとして、この指摘から『椿説弓張月』の長編化構想に中国の長編白話小説からの影響を重視することはできないと理解してもよいことにならうか。ただそれだからといって、日本の物語伝統をことさらに重視するというのではなく、本作品の長編化は白話小説の影響だけではなく、もっと日本の物語伝統を考慮すべきだという示唆として受け止めたいと思っている。

そこで、本稿では『椿説弓張月』の長編化構想をその筋立からも析出される〈話型〉を中心にして考えてみたい。〈話型〉とは現代の昔話研究の用語で、昔話の構成要素の単位を指す語だが、中世の説話や物語にも認められることは周知の事実になっている。この〈話型〉が注目されるのは、それが宗教的あるいは説教的な縁起などの口承性にかかわることで、雅なる文学に理解を示せない多くの新興町人層にも宗教心に訴えるかたちで共有されていたとみてよく、馬琴の読本はそれを媒介にして珍奇な物語内容が理解されていたと考えられるのである。

その背景に考えられるのが中国の白話小説の「話」の認識だったと思われる。馬琴は読者や貸本屋を強く意識しており、長編物を成功させるため、すでによく知られた作品を数多く引用したり参考にしたりにしている。そのなかで、もっとも影響が大きかったのが中国白話小説の演義小説である。馬琴はその演義小説の手法を取り入れ、創作の中心的方法として利用している。それをどのように利用しているかと言えば、たとえば、長編作品である『南総里見八犬伝』の序をみると「肇輯五卷は、里見氏の安房に起れるよしを演（のぶ）。亦是唐山演義の書、その趣に擬したれば、軍記と大同小異あり」と述べている。「演（のぶ）」とは語ることである。

小説（話）を語るといえるのは、小説を口演者が語り、その巧みな語りを聴衆（読者）が耳から聞いて楽しむというも

のであつた。馬琴はそのことを十分に理解していた。そこには小説が雅の文学を重じた教養の高い人々だけではなく、文盲に近い庶民にも楽しんでもらいたいという馬琴ならではの背景がある。そのためにはどんな工夫が必要か、実はそのことが長編化構想にかかわってくる。

その姿勢はすでに最初の長編小説『椿説弓張月』にも認められる。作品最初の口絵に続く自序部分にその原型になる姿勢が提示される。次はその自序最初の記述である。

この書保元の猛将八郎為朝の事蹟を述。その談唐山の演義小説に倣ひ多くは憑空結構に成。閱者理外の幻境に遊ぶとして加なり。

作者馬琴は、この読本は『保元物語』の為朝説話を主要な筋立（「事蹟」とするが、本文は「演義小説」の語りの方を採用すると）言っている。そこには単なる史実の忠実な再現ではなく、まるで幻想世界（理外の幻境）に遊ぶことだという。このとき〈語る〉は〈騙る〉でもある。そこに幅広い読者（聞者）を楽しませたいという意図が強く押し出されている。そのような構想は後編巻一の備考にも「コノ弓張月ハ、唐山ノ演義ニ擬シ、專作り設タル物語ナレド、今アゲツラフコトノミハ、例ノ寓言ニアラズ。只世ノ童子等ニ、為朝ノ武徳ヲ知ラセマホシクテ、漫ニ筆ヲ走ラスルノミ」と述べている。ここから、作者の確固とした構想上の信念となっていたことがわかる。そこからは為朝の伝記談を演義体で書くという作者の意図が為朝の歴史的事実を〈語り〉Ⅱ〈騙り〉によって奇想天外な伝奇小説に作り直そうとしていることがうかがえよう。

この〈騙り〉という方法については『椿説弓張月』の拾遺の始めにも稗史小説から影響を受けていたと明確に書いていることにも見てとれる。そこで拾遺の冒頭部分を見てみよう。

古人言あり曰く、稗編小説は、蓋し正史の文を演べて、而して之を家諭戸曉せんと欲す。坊間野史の諸書は、乃ち風を捕へ影を捉へ、以て市井の耳目を眩ます。孰れか社撰無稽反つて人の觀聽を乱すを知らんと。今弓張月の一書は、小説と云ふと雖も、然も故実を引用し、悉く正史に遵ひ、並びに巧みに一事を借り妄りに一語を設け以て世人の惑を

滋くせず。故に源あり委あり、徴すべく據るべし。

ここから稗史小説と「正史」、あるいは「坊間野史」の関係を問うこともできようが、あえてそのことは置いて本稿の課題たる長編化構想の観点からこの冒頭部を捉え返してみよう。馬琴は作品の長編化のため、趣向や技法を中国の演義、稗史小説から取っていることを確認しておこう。その演義、稗史小説とは語り文芸を記録した話本小説の構造から出発していることは周知のことだろう。話本小説とは口語体によつて書かれた小説のことで、唐代僧侶の説講や、宋代講談の筆記から始まり、特に宋代に発生した説話の台本である話本に基づいてるとされる。この話本は口述されてきた説話を台本として記録し始めたもので、「話」の筋立に「章、回」という段落をつけていることから、その説話の台本を話本といい、次第に目で読む物として定着し、それを話本小説と呼んだわけである。このように宋・元時代の口語体の語り物（講釈）の台本から発展した読み物が、明代になってから口語中心の長編白話小説に発展し、短編作品より長編作品が大衆の人気を得ることになった。

このような長編作品は章回小説とも呼ばれるが、それは段落区分の仕掛けとしての「話」構造を元にした「回」構造が中心になったからである。百回の『金瓶梅』、百二十回の『水滸伝』、『三国志演義』、『紅樓夢』などがその代表的な作品である。なぜ章回という構成を取つてののかと言えば、説話が大衆に聞かれる時、興味を持続化させるために面白さを早く伝える仕掛けだったとされる。

「話」の内容を「章、回」などの形式で区切りをつけ、「話」の筋立を細分化することで聴衆（読者）の興味を惹き付けてきた。話本小説、白話小説の典型性・類型性・反復性がよく言われるのだが、それは「話」の性格によるといことができる。本稿ではその「話」に対する馬琴の理解を中心に、その長編化構想に迫るつもりだが、いずれにしても、「話」を細分化する構造が読み物としての長編白話小説にもかなり大きな影響を与えた。それとともに見逃してならないのは「話」の口演性であつて文語を避けて口語を中心にする「話」の文体を利用し、雅の教養からは疎外されていた庶民層の読者も読めるようになった。このように白話小説の根本には「話」の構造が深く染み込んでいる。

ただし馬琴が白話小説の「話」の構成を取り入れたということには江戸時代の出版事情が大きく影響している。江戸時代に出版された本は貸本屋を通して一般読者に読まれてきた。馬琴にとつても貸本屋との関係が深かつたことはいうまで

もない。馬琴と貸本屋の関係に対して大高洋司は「馬琴はまず貸本屋を念頭に置いて読本を書き、京伝は必ずしもそうではなかった。(中略)馬琴に準じ、力関係においても本屋の発言力が一層増大する、といったケースが一般的と予想される」と述べ、馬琴読本における貸本屋の影響力を強調している。この関係が本稿にとつて重要なのは、貸本という形式によつて読者がテキストを読む(あるいは語つてくれたものを聴く)時間が限られるということである。つまり、そのために「話」の全体を読むことができないとすれば「話」を細分化するほかにないことになる。そこに「章、回」という区切りが必要になったと考えられることである。

しかしそれだけではなく、読本に人気が出た場合、逆に「話」を拡大・増幅することで、読者の興味をつなげ止める必要もあつたと思われる。そこでより機能的に作品を売るという目的で「話」の類型性・反復性が求められた事情も考えておいてよからう。

中国の白話小説の原型になる「話」の内容を形式、そこには語られる文芸の伝統が貫いている。貸本屋を通しての表現享受の場の事情がそのような「話」の内容と形式にかかわるとすれば、そのことこそが馬琴小説の長編化と深く関係しているのではないか。そのことが馬琴長編化構想と〈話型〉の関係として本稿では問われることになる。

馬琴は白話小説の「話」の内容を形式にこだわった。それは眼で読むというよりも耳で聞く物語の伝統を意識するということであった。野史ではなく、正史に基づいた話を創造し、その正史は中国のものではなく、その時代に一般の人々によく知られていたものであった。中国のある一つのジャンルを踏襲して何かを再生産しようとしたのではなく、巧みにアレンジして日本的なもので蘇らせているのではないだろうか。

以上のように「話」の伝統を考慮したテキスト、貸本屋から本を借りて読む時、発生する時間の制約などが創作方法にも大きな影響を与えている。作品のテキストはその条件に従うことになる。その条件下で、馬琴はどのような技法を利用しながら本作品を長編化して書いたのか。本稿では「椿説弓張月」におけるストーリーを支える、あるいは貫くといったほうがよいかもしれない〈話型〉を検討し、後期読本の長編化構想を論じていきたい。

二 「椿説弓張月」における〈話型〉

前述したように白話小説は語り伝えられてきた説話（「話」）に基づくといった構造を取り入れるとともに、その「話」を「回」という区切りを利用して毎回一定の時間で読み切れる体裁を取っている。そのような体裁が取り込まれた背景には近世初期にすでに『諭世明言』、『警世通言』、『醒世恒言』などの「話」の構造を持つ作品が伝わっていたことが指摘できよう。その「話」形式の作品が前期読本に大きな影響を与えており、最初の読本として知られている『英草子』も一巻に二回の「話」で構成されているところにもその影響を見てよからう。ただし「回」という語はまだ用いられてはいない。それが後期読本になってからは長編の白話小説の影響が浸透し、「回」の体裁に変わり、長編化して書かれるようになった。このように目で読むという読者行為の基盤には〈語り／聞く〉といった演義文芸の残映が多く残されている。

ただ近世には実際に読本が語られていたとは言い難いが、その形式面では〈語り／聞く〉という形式の「話」の構造を取っていることは注意しておいてよからう。このことは中村幸彦が「読本発生に関する諸問題」⁵⁾で、読本発生の問題として中国白話小説だけではなく、長編仏教説話（勸化物）などの影響を指摘したことと大いに関係がある。中世における説話・談義といった語り文芸の伝統が近世にまで入り込み、それが読本の文体（テキストの形式）にも大きな影響を与えていたと思われる。

「話」という話本小説の構造は先に述べたように語り文芸が持つ制約を当然持っていた。読本は殆ど貸本屋から借りて読まれた。近代の読者は本を自分の元に置いて読めたが、江戸時代はそれが困難であった。いまだ庶民（下層町人）の場合、読本を個人で購入して何度も精読することまではできなかった。何人かの読本好きが集まって一冊の読本を借りる。そしてそれを識字層の一人が読み、周囲に集まった他の者たちが耳を傾けて楽しむ。このような享受が多くおこなわれたにちがいない。

そこで、読む者、聴く者には理解の程度や、あるいは〈語り／聞く〉という行為でおぼえる精神的疲労などによって時間の制約が生じる。そこに物語を短く、「回」でまとめる工夫が受け入れられたとみてよい。このような享受モデルにあっては長編を一回で読んだり聞いたりすることはできないはずだ。考えてみれば、近代の小説は多様な人物の行動・心理描写、様々な情景描写などもそのテキストを所有していることによって時間の制約なく黙読できれば、いつでも読み返すこ

ともできる。それゆえ小説が長編であつても時間をかければ読み通し、楽しむことができる。だが、時間的な制約性を持つ読本にとつてはそれが難しい。ある程度の教養を持つ読者を相手にしても早く理解させ、続けて読むようにするために「話」、すなわちストーリーなどを単純化、定型化、類型化する必要があつた。そのためにも「話」のモチーフになる「話型」が必要である。

前述した「話」の構造を持っている話本小説から発展した稗史小説には、その原型になる「話」が必ず存在している。稗史小説の趣向を取っている馬琴の『椿説弓張月』もまたこの稗史小説の「話」の体裁から物語を發展させている。それとともに「話」の伝統を考慮した馬琴はこの読本を執筆するに当たつて、「鎮西八郎為朝外伝」という角書が示唆するように、実は『保元物語』の為朝説話をそのまま採用していない。というのは「椿説」は珍奇・珍説という意味を持っている。史実にあらわれない伝奇という意味だからである。

たとえば、前編の一回から五回までの筋立をたどつてみると次のようになる。まず冒頭に為朝の出身家系と優れた武士であることを紹介する。そこから「話」の内容に入っていく。少納言信西が崇徳院の御所で韓非子という漢籍を読むと聞き、父為義は子の為朝をつれて御所に参る。そこで、為朝は初めて信西と出会うことになる。しかし為朝は強弓の武士をめぐる議論で信西と対立し、彼の憎しみの矢面になる危機に陥る。それを超人的な行動で乗り切るが、このことがきっかけで為義・為朝父子に対する信西の恨みは増大する。その信西の恨みで、為朝は乳母子須藤九郎重季とともに、筑紫へ出発する。為朝は豊後国尾張権守季遠の居所に居候することになったが、ある日、木綿山へ狩をしに行つた時、狼の戦いを止めた礫の名人紀平治と会う。その紀平治と主従の契約を結ぶ。為朝はその山に蟒蛇(うわびみ)が出現しこれを退治するが、それまで為朝が従者として引き連れていた山雄と呼ばれる狼と重季は死にいたる。その代わりに珠を得ることになる。みてわかる通り、この筋立は『保元物語』の為朝説話とは全く異なる。「椿説」なるゆえんである。しかし『保元物語』の為朝造型については次のようにあるのが注目される。

かの為朝はさるものなりとは兼ねても聞召をかれたるうへ、父是ほど拳し申あひだ、やうあるべしとてめされけり。きりやう・ことがら・つらたましむ、誠いかめしげなるもの也。其たけ七尺にあまりたれば、普通の者には二三尺計指あらはれたり。生付たる弓取にて、弓手のかいなめてより四寸長かりければ、矢づかをひくこと十五そく、弓は八

尺五寸、長持の柄にもすぐれたり。(中略)或は神力をさきとして、武威の譽を残せり。今の為朝は神力すくやかにして、強楚が貫山の勢にもとらず。弓の手こまやかにして、養由が百歩の藝にあひおなじ。長良が帷帳のうちはかりこと、紀信が乗車の上のいさみ、只一身に数藝をかねたれば、猛畧武道さながら古今の間に濁歩せり。人目をおどろかし、舌をふらずといふものなし。

それに対して本作品の冒頭で語られる為朝像とはいえば、

冠者為朝と聞えしは、知勇無雙にして身の丈七尺、豺の目猿の臂、臂力人に勝れて、よく九石の弓を曳、矢繼早の手煨煉なり。されば天性弓馬の妙奥を極むべき人にやありけん、生まれながらにして弓手の肘、馬手に四寸伸びて、矢束を引こと世に超つ。

とある。このように『保元物語』の為朝像をそのまま引き受け、武勇に勝れた中世的な武士の姿を提示していることがわかる。本作品は為朝の英雄譚ともみられるように、主人公の武勇譚が「話」の中心なのだが、『保元物語』の為朝が背丈七尺の巨人で、左腕が右腕より四寸長く、強弓を引き、しかも速射の名人であったと紹介されている。その四つの要素を馬琴は巧みにまとめて為朝という人物の特徴としてあげている。

このように、為朝像は『保元物語』に拠りながら「話」は「椿説」を求める『椿説弓張月』。その「話」はどのようなものかといえは、後述していくように、筑紫、伊豆の八丈島、そして琉球へとというように、為朝の流浪のストーリーが主筋となっている。そのプレ・テキストとはいえば、『椿説弓張月』続編巻一の「援引書目」が参考になる。そこには『参考保元物語』から『杜騙新書』まで、二十七冊の書名が引かれている。「援引」とは自説を証明するため他の文献・事例などを引用することで、作者馬琴は様々な典拠を本作品の「話」の参考としてあげている。その中で、最も注目すべきものは『参考保元物語』、『和漢三才図会』、『本朝神社考』である。その『本朝神社考』に拠ると、

琉球へ渡り給ひしといふ説、原何の書に出ることをしらず。しかれども神社考に伝、「為朝八丈島より鬼界に行、琉

球に巨る。今に至り諸島祠を建て島神とす」といふ。寺嶋が和漢三才図会に又伝、「為朝大島を遁出て琉球国に至り、魑魅を驅て百姓を安くす。洲民その徳を感じて主とせり。為朝逝去のち、球人祠をたて、神號して舜天太神宮といふ」といへり。

とある。この短い言説に馬琴『椿説弓張月』の物語の全てがあるということもできる。

為朝琉球渡りをモチーフにした為朝伝説は各地にあるが、なかでも伊豆の八丈島や沖繩では数多く伝えられている。日本史大事典（第六卷、平凡社）によると沖繩の伝説では、為朝が伊豆から風に流されて沖繩の運天港に漂着し、島尻の千里大按司の妹との間に一子尊敦をもうけ、この尊敦が沖繩王の祖舜天となったと伝えられるが、このような伝説は五山禅僧月舟寿桂の文集『幻雲文集』、袋中の「琉球神道記」（二六四八）に見え、琉球の最初の正史『中山世鑑』（一六五〇）には詳しくこの伝説が記されているのがわかる。

しかし馬琴が参考にしたのは後編卷一の備考に載せられている『元史類篇』、『中山傳信録』の為朝伝説ようである。前編に続く「話」のさらなる展開として作者がかなりそのモチーフにこだわっていることがうかがえる。

為朝琉球へ渡り玉ヒストイフコト、神社考、及和漢三才図会ニ記載ストイヘトモ、フルクハ我邦ノ史籍軍記ニ見エザルヨシハ、既ニ前編ニイヘリ。然ドモソノ論未盡ヲモツテ、再コ、ニ辨ズ。余嘗元史類篇、中山傳信録ヲ閱スルニ、琉球中興ノ主、舜天王ハ、スナハチ為朝公ノ子ナルヨシ、其書ノ注ニ見エタリ。

なぜ馬琴が琉球島渡りにこだわるのか。そこに本稿の課題とする長編化の構想が捉えられるのだが、その鍵語となるのが〈話型〉という概念とその反復という方法なのだが、次節ではそこに考察を向けよう。

三 〈話型〉の反復―新たな地域への放浪による話型の繰り返し―

すでに論じたように、『保元物語』の為朝説話とは全く異なる京都における為朝の物語なのだが、それでも為朝と筑紫

の結びつきは無視し難く、院政の大立者信西に憎まれた為朝をかばって、父為義は彼をひとまず筑紫へと遣わすことにした。為朝の流浪が始まることになる。

筑紫の豊後に着いた時、為朝は黄金の牌がついた鶴を助けて大切に面倒を見る。やがて夢の啓示を受け、鶴を持って肥後国へ赴く。ここで肥後の在地土豪と思われる阿蘇三郎平忠国とその娘の白縫という新しい人物が登場し、白縫が飼っていた猿が白縫の下女若葉を殺す。忠国は大いに怒り、猿を殺した男を婿にすると断言する。猿は文殊院の小寺に逃げ籠もってしまったために、殺生を禁ずる寺のこと、弓を引いて猿を殺すことが禁止される。そこで、為朝は一計を案じ、鶴を放して高い塔に昇っていた猿を落して殺し、忠国に賞でられ白縫と結婚することになる。為朝は白縫を妻に迎え、忠国の後桶を得て、その武勇は隣国に広がった。それで九州の武士達は味方になったり、敵になったりする。為朝は敵対する者を討ち、一年の間に九か国を征服し、人々は鎮西八郎と呼ぶようになった。

このあらずじでたどった「話」に注意すると、ここで始めて貴種流離譚の話型が見てとれるようになる。①筑紫という周縁に放逐された為朝はその地の土豪に身を寄せる。すると、②悪猿が現われ土豪の家に危害を及ぼす。そこで③為朝が智謀をもって悪猿を退治する。④それを喜んだ土豪が娘を為朝に与える。このあらずじから析出されるのは本来「保元物語」の為朝説話には見出すことのできない貴種流離譚の話型である。⑤白縫と結婚した為朝は九州の九か国を抑え、統治することになる。あらずじに付した番号を整理すると、①貴種は中央から周縁に放逐される。②悪なる靈的存在が周縁に混乱をもたらす。③貴種はその試練（苦難）を克服する。④周縁の王に喜ばれてその娘と結婚する。⑤周縁に流された貴種は地方を統治、文明化させるといふうに捉えられよう。

本作品の原型になる「保元物語」の為朝説話の筋立をみると次のようである。乱暴な為朝は父為義の勳当を受け、九州の武家に預けられる。そこで武威を振って近隣の武家を服従させ、やがては「総追捕使」と自称するようになる。やがて京の天皇家と摂関家に内紛が起り、崇徳天皇、頼長は為義の武力に頼むようになった。そこで父為義の要求で都に戻り、都での保元の乱に参加し奮戦する。保元の乱に破れた後、強弓を引かせめように為朝は肩の筋を抜かれた上、伊豆の大島に配流される。これが「保元物語」の為朝説話である。

この説話からは確かに「中心からの放逐」、「周縁における試練と克復／周縁の混沌の制圧」、「中心への帰還／中心の退廃の再生」、しかし中心の再生に失敗する（敗北）、「中心からの追放」など、貴種流離譚の話型にきわめて近いモチーフ

が析出されることは確かだが、むしろその話型の崩れといったほうがよいかもしれない。それに対して前述した馬琴の『椿説弓張月』は完全な貴種流離譚の話型に沿っている。

貴種流離譚とは幼い神や英雄が、本郷を離れて流浪し、様々な試練を経て、動物・女性などの助け、知恵の働き、財宝の発見などによって困難を克服して尊い地位に上がったたり、死後、神となるというものである。すでに見てきたように、『保元物語』にも為朝という貴種の放逐、周縁での苦難、貴種の中央への帰還、放逐された地域に新たな文明を創造するなどの貴種流離譚の話型が崩れて見えていた。貴種流離譚は世界の様々な物語文学で見られる話型で、日本ではよく知られているように折口信夫の論が有名である。作者馬琴は本作品の重要なモチーフとして、この貴種流離譚の話型を取り入れたのである。この話型は『椿説弓張月』では主人公為朝の流浪による地理的空間の拡大と絡み合い、様々な空間で反復されており、登場人物を差し替えることで話型を連鎖させていく。その反復と連鎖が本作品の長編化の重要な構造になっている。それを考察することが本稿の課題だったわけである。

本作品における為朝をめぐるストーリーはこのような貴種流離譚の話型を反復することによって長編化されていく。この話型の反復は為朝が琉球に渡り、その地に新しい文明を創造するに至るまで続く。その間為朝は様々な地域で苦難に落ち、それを乗り越え、そしてその地域出身の女性と結婚するといったストーリーを反復することで物語を長編化していく。筑紫を旅立ったあとの為朝は伊豆の大島、女護嶋・男の嶋（鬼が嶋）、琉球の順で島渡りに流浪していくことになる。それが①に当たる周縁への放逐、流浪である。それぞれの冒頭部を掲出しておこう。

- ・ 詰朝乳母子須藤九郎重季只一人を召具して、都の空もすみ果ぬ、月も西へと入かたのその暁の星を戴き、こゝろ筑紫の果までもと立出つ、……
- ・ 源為朝を伊豆の大嶋へ配流るゝの条、路次もつとも心を用ひて召具すべきよし、周判官季實をもつて仰らる。
- ・ かくて為朝主従は、女護の嶋を船出しつ、南を投て漕と漕ほどに、海上二十里ばかりなるを、只半日に乗とほして、男の嶋へぞ着たりける。

これらの叙述のあとは、最初の引用のあと筑紫で悪猿を殺したように、大島では悪政を行っていた忠重を懲らし、琉球

では妖術使い囃雲国師を退治するなど、様々な苦難に落ちてはそれを乗り越える。これが前掲した話型②↓③に照応しよう。いずれのストーリーにおいても放逐された周縁で武士の娘白縫、奸臣の娘鯨江、また島人の娘長女と結ばれている。それぞれの本文を引用すると、

・されど白縫は、いまだ為朝の為人をしらざれば、とみにも承引ざりしが彼人は、父の為に恥辱を雪たる恩あれば、その契約を破らんも義にたがへりと思ひかへし、ともかくもと回答しかば、忠国大によるこびて、やがて日を卜、吉席を設て、酒食盃盤に至るまで、悉美を竭し、その夕為朝に、白縫を妻あはせけり。

・為朝は元米色を好み給はざれども、又その志をも空しうしがたくおぼして、臥房ちかく召れしかば、鯨江三年が程に三人の児を産て……

・為朝やがて長女を妾とし、一年あまりこの嶋に在しけるに、その年の暮に、長女男児を産めり。

となる。これらが話型④に当たることはいうまでもあるまい。そのち為朝は筑紫とその周りを征服して周縁を平定した(秩序づけた)ように、その後はさらに大島、女護嶋・男の嶋に牧畜と農業の技術などを伝播してその地を豊かにさせている。また、男女が一緒に住めないという迷信などもなくし、その地を秩序づけ文明化させる(⑤)。

・為朝大嶋を管領し給ひてより、民に耕作蠶飼を教へ、みずから山野徇徻にして業をすめ、善をあげて不能をあはれみ給ひければ、洲民よろこびて父母のおもひをなせり。

・さる程に為朝は、三宅、新嶋、神津、利嶋、御藏、すべて五の嶋をも打従へ、数十艘の船を造らせて、往返國司に異ならず。

・我今彼等を教化して、男女を一ツに住し、伊豆七嶋のうちに加へば、後の世に益あるべしとおぼして、殊さらに言葉を和げ、ふかく憐み給ひしかば……

為朝の島渡りという伝説は、たとえば大島での話は古本系の半井本『保之物語』にも見えているが、女護島以下、琉球

までの物語は、すでに見てきたように、在地に伝えられた英雄伝承であろうと思われ、したがって馬琴は、そのような在地伝承の「話」を採録していったわけである。それらの「話」を娯楽として提供するために、誰もが共有していた貴種流離譚の話型をもってそれぞれの在地伝承をあたかも申刺しするように貫いていった。反復と連鎖という馬琴の長編化構想が見えてとれよう。

四 〈話型〉の連鎖—琉球と繋がる「話」の構造—

馬琴『椿説弓張月』のストーリーの最後は琉球に理想的な国を誕生させ、神的存在になることで締め括られている。為朝の神格化は在地に根づいた為朝伝説の帰結であつて、それが庶民に共有された「話」にとつて望ましい終り方であつた。馬琴はそれを受けて次のように語り収めている。

為朝既に福祿寿仙の擁護を受、又讃岐院の引接によつて、往ながら神となり、神変不測の通力を得て、日の本へ飛歸り給ふといへども、なほ人間にありし日の、夙念を果さん爲に生を利し、死を救んと誓ひ給ふなるべし。

このように貴種流離譚の話型が筑紫、伊豆の大島、女護嶋・男の嶋の「話」を受けて、この琉球を舞台にした「話」でも反復されている。ここでもまたこの読本では一つの空間ごとと同じ話型に支えられた「話」が繰り返されていることが確認できる。

ただこの為朝の琉球渡りの「話」はこの読本のクライマックスを構成するエピソードに当たるところから、それまでの「話」よりも大がかりな仕掛けが施される。それをまとめると次の三つになろう。

1. 「話」のヒロインとなる寧王女と悪人にも貴種流離譚の話型の「話」が用意されていること。
2. それまでの「話」に見えていた主従関係が動員されるとともに、為朝の息子舜天丸にも貴種流離譚の話型が施されていること。

3. 「話」の読本はこの読本の主人公為朝が神になることで終わっていること。これは中世貴種流離譚（『神道集』、本地

物語の結末がほとんど主人公の神化をもって終わることを受けていること。

このうち、3についてはすでに中世の本地物語の語り文芸研究で研究が蓄積されているので言及しなくともよからう。本稿では1、2を考察することにしよう。

そこでまず1だが、それは寧王女の受難の「話」で、まさに琉球という他国での貴種流離譚といつてもよいものである。寧王女は嚙雲国師と中婦君の計略によって琉球国の都から離れ、琉球周縁の地に放逐される(①)。

中婦君の妬にて、彼嚙雲国師に盗せ給へりとは猜しながら、證據なければいひとくに道なく、畏けれど、王も又、御こゝろ浅はかに在ずをもて、終にこれを曉得給はず。忽地中城を廢して庶人となし、わらはとともにこの処に棄られれば、ありし昔にかはりゆく、朝の山のしら雲も、住はてがたき都を隔、泣みかなしみ空蟬のわが身の秋をかこちつ、ここにある事三歳におよび……

三年間の悲しい生活の後、為朝が持つてきた玉のお陰で中心の琉球国の都に戻ることができる(③)。最後には死んだ白縫の霊が憑き、命を救われ為朝とともに天に登ることになる(⑤)。女性を主人公とした貴種流離譚の構造が見てとれるように、そこには放逐、訓練の克服、昇天、そして神となるというモチーフが連鎖している。主人公の為朝以外にこの話型が他の重要人物にも認められるのはこの琉球渡りの物語だけだが、実はこの悪人の嚙雲国師にもこの話型が認められる。

その意図にはおそらく馬琴の読本にはなじみの勧善懲悪の主題による悪者のせり出しがあるのだろう。この操作によって善の代表である為朝と対等に渡り合う悪人が造型されることになる。後半部分において巨大な悪(敵)として登場している嚙雲国師は、琉球を開国した王により旧虬山に放逐され石の中に閉じ込められる(①)。しかし尚寧王が旧虬山の虬塚を暴いたとき国師は石の中から解き放たれ、遂に世の中に出ることになる(②)。その後、利勇や中婦君と策謀をめぐらし寧王女を苦しめ、さらに妖術を用いて妖獣禍を呼び寄せ、王と中婦君を殺す(③)。こうして王権を奪い嚙雲法君と称す(⑤)。ここまでは琉球国の篡奪主となる嚙雲国師誕生の物語である。悪の権化ともいえるべき国師の素性が貴種流離譚(変形)の〈話型〉で語られる。その後、勧善懲悪のストーリーが展開して国師は善の英雄舜天丸の矢と為朝の宝剣に

切られる。

次に2だが、このプロットでは血筋による貴種流離譚の連鎖もみられる。為朝は白縫、鯨江、長女と結ばれるが、そのうちの一人である白縫が生んだ舜天丸は、琉球統一後、為朝の後を継いで琉球王になる。正室の白縫との間に生まれた舜天丸に貴種流離譚の話型が結びついているということは他の子供達と違って貴種として認められていることをうかがわせる。

このように馬琴はここでも新しい貴種流離譚を反復させる。後半部の琉球の物語になると、為朝は神となつて昇天する。ここから『中世世鑑』の始祖伝説とは異なるプロットになるため、為朝以外の王が必要になり、琉球王になるというのが舜天丸の貴種流離譚である。

主従只二人、姑巴嶋に五七年の月日をおくるに、鹿の皮を衣とし、鳥の羽を袂とし、夜は窟宅の内に臥し、昼は磯方に千鳥を友とし、朝なく、海より出る日影を見ても、故郷のなつかしければ、舜天丸は、(中略)胸くるしさはいかなりけん。思ひやるにも哀れなり。

舜天丸は姑巴嶋に紀平治とともに流されており(①)、様々な試練にも遭遇する。その後、為朝と再会し、最大の敵である嚙雲国師を退治するために大きな役割をはたしている。嚙雲退治の兵法を仙人から聞き、矢を射つて嚙雲を殺す(②)↓(③)。このことは最後に、舜天丸が琉球の王になる設定と強い関係があると考えられる。嚙雲国師を殺した後、小萩を皇后として、また久米子を次の后として迎えている(④)。「舜天丸は脱るゝに道なくて、中山王の位に即、龍宮城を更て即欲會殿と号し、舜天王と稱し給へば」とあつて舜天丸が琉球王に即位している(⑤)。このように舜天丸を貴種とした貴種流離譚の構造が後半部を占めている。このように為朝以外にも、系譜による長男としての優先権を持つ舜天丸の貴種流離譚は、本作品の長編プロットにおいて為朝の貴種流離譚に続く重要な骨格になっている。

さらに、紀平治という人物が注目される。紀平治は前編二回、筑紫で為朝と主従の関係を結んでおり、父子に仕えた家臣である。この紀平治が琉球に起源を持つことは琉球渡りの「話」の構造にとつて重要なモチーフになっている。紀平治は為朝、白縫、舜天丸などに付き随つて様々な場所を流離している。前編では為朝を連れて琉球に渡り、保元の乱後は為

朝を奪還するため、白縫と大島に向かっていた。後編では、舜天丸とともに姑巴嶋に流され、大きな試練に遭遇している。このストーリーからみても、為朝と主従の関係である紀平治に関しても流離譚の話型がみられる。紀平治の祖父は琉球の人で、琉球から筑紫に漂着した。次が紀平治の祖父の流離に関する部分である(①)。

それがしは紀平治といふ獵夫なり。祖父は元琉球国の人なりしが、一年漂流してその船筑紫に着しかば、遂に日本に留りて、肥後の菊池に奉公せり。しかるに祖父没して後父なるもの故ありて浪人し、この豊後に移り住むといへども、世わたる便なきまゝに、獵人の業をなして一生をおくり、それがしに至りてもなほ業を更す。

紀平治は筑紫で狼の生活をし、八代と結婚する(④)。その後、為朝と主従の関係を結び、琉球と一緒に渡るが、霧雲の妖術により離れてしまう。白縫、舜天丸とともに島の貧しい生活を経験する(②)。琉球統一後、法司となり舜天王の補佐役をする(⑤)。このように紀平治に関しても流離譚の構造が同様に描かれており、為朝、白縫、舜天丸などの貴種を補佐したうえ、流離譚の話型が反復・連鎖されている。為朝の貴種流離譚の話型は血筋、主従の関係によって、実子の舜天丸、家臣の紀平治にも反復・連鎖されていくといえる。

おわりに

本稿では馬琴の『椿説弓張月』の長編化構想を、話型の反復と連鎖という点に着目して考察してみた。馬琴はその趣向として稗史小説を採用しているが、もつと根本的な構造としてはその稗史小説が持っている「話」の構造を取っていた。また、稗史小説が描こうとした正史を日本のものから探し、本作品では為朝説話がその正史である。このように本作品は為朝説話から長編化のための「話」の構造をとり、それから析出された貴種流離譚をベースにした話型を作っている。

この為朝という貴種の放逐、周縁での苦難、周縁の女との結婚、貴種の中央への帰還、周縁と中心における新たな世界創造という話型を持っている。主人公の空間移動、逸脱という方法が用意され、様々な登場人物における同じ話型が反復、連鎖されていく。そのような話型の反復、連鎖によって本作品は長編化して書かれた。近代の人物の心理、情景描写

などによるストーリーの展開とは違う話型に沿った展開の仕方である。また、様々な地域を舞台にしたのは、近世の空間認識の拡大と新しい地域に対する民衆の興味などにするものである。作品舞台の拡大もまた本作品の長編化にとつて大きな役割を果たした。このような話型の反復と連鎖、空間認識の拡大は本作品が長編化して書かれることに重要なモチーフになっている。

注

- 本稿に引用したテキストは後藤丹治校注『日本古典文学大系六十・六十一 椿説弓張月上下』（岩波書店、昭和三十三年・三十七）による。
- (1) 『椿説弓張月』は二十八巻・二十九冊（前編・後編・続編各六巻、拾遺・残編各五巻）で葛飾北斎（一七六〇—一八四九）が挿絵を画いた。文化四年（一八〇七）から同八（一八一二）年まで書かれ、板元は平林庄五郎・西村源六である。
- (2) 「唐山の演義小説に倣ひ、多くは悪悪結構の筆に成る」とあるやうに、支那小説に脚色を借りたもので、殊に為朝が琉球に渡つてからの事蹟は主として水滸後伝に趣向を求めたものである。「麻生磯次『江戸文学と中国文学』（三省堂、昭和二十一年）。
- (3) 大高洋司「『椿説弓張月』構想と考証」『日本文学研究論文集成22 馬琴』（若草書房、二〇〇〇年）。
- (4) 大高洋司「読本と本屋―京伝と馬琴の場合」『国文学 解釈と教材の研究』（學燈社、一九九七年 九月号、八三頁）。
- (5) 「読本発生に中国白話小説とらんで、大きな影響を及ぼしたものに、この仏教長編説話があつたことが確言できるであろう。そして史書古典を用いることや、長編小説を構成することや、同じく懲悪勧善と言い、因果応報といっても、中国小説とやや違った読本のそれらと同じ日本的なものを持ったことや、和漢雅俗混濁文を用いることの、手取早き見本を、読本作者に示したものはむしろこの類であつた。」「読本発生に関する諸問題」『中村幸彦著述集 第五巻』（中央公論社、昭和五十七年、三九二頁）。
- (6) 永積安明、島田英雄校注『日本古典文学大系31 保元物語 平治物語』（岩波書店、昭和三十六年、八一—八三頁）。
- (7) 「日本の古い文学は貴種流離譚といふ一つの類型を持つてゐる。源氏物語の須磨ノ巻・明石ノ巻においても、あるひはまた古今集の業平の歌、あるひは小野篁の歌においても見られるごとく、上代には貴種流離の話が非常に多い。竹取物語もさうだし、丹後風土記にもかかる類型が出てくる。身分の高い幼い人が流されるといふ悲しい文学の型は夥しいほど多い。これはおそらく日本民族が古代から通じてゐた信仰の一つであろう。」『折口信夫全集5』（中央公論社、一九九五年、一一八頁）。